

いつも明るく前向きに生きたい、との願いは誰しも持つているものです。

人生は山あり谷ありで、「禍福は糾える縄の如し」という言葉にもあるように、良いことも悪いことも繰り返して起ります。

自分にとって好ましい状況の時には、誰しも明るく朗らかな気持ちになります。反対に、様々な難問や苦悩に直面した時は、それを抵抗しようとする力が働き、迷いや責め心が生じてしまうものです。

しかし、このような逆境の時にこそ、その状況を前向きに受け止められれば、さらなる充実した人生を送ることができるのではないのでしょうか。

では、どうすれば苦難の時に朗らかな心持ちで過ごせるのでしょうか。

シエイクスピアの言葉に、「豊かさや平和は臆病者をつくる。苦難こそ強さの母だ」とあります。また、倫理研究所の創立者・丸山敏雄は、「苦難」と題した論文の中で、「苦難は人をより善くし、より一歩を進めさせよう、向上させようとして起こる」と論じています。

苦難の原因は、自身の生活の不自然さが赤信号として現れているのであって、苦難を嫌ったり、諦めて耐えたりするのではなく、喜んで朗らかに静かに苦難を迎えることが大切であると説いています。

◆ 製造業を営むS氏は、父の突然の病を機に、二十五歳の時に実家に戻りました。その半年後に父が亡くなり、叔父が事業を継



苦難の時こそ 明朗な心を掲げよう

承しました。やがてS氏が三十九歳の時、社長に就任しました。社長就任後、経営の立て直しに孤軍奮闘するも銀行側の債権機構への一方的な売却で窮地を迎え、翌年に自己破産を余儀なくされたのです。僅かに残った事業で再出発を図りましたが、うまくいきませんでした。

家庭においては、長男の引きこもりや母の認知症の問題もあり、綱渡りが続く状況の中、心身ともに疲れていた時にS氏は倫理法人会と出会いました。

ある日、富士高原研修所の経営者セミナーに参加しました。そこでS氏は、自分を見つめ直す実習で亡父の面影に触れます。「お前も大変だったな。頑張ったな」と語りかけるような父の声が聞こえ、倒産を招いてしまったという自責の念が癒やされたといいます。父が天国から見守ってくれていると確信したS氏は、心晴れやかに再出発を誓いました。

それから、即行の実践や墓参、長男へ百日間ハガキを送る実践に取り組んでいくと、次第に長男の心境も変化し、S氏との関係性も改善していったといいます。

苦難の最中であっても、自分を見つめ、「これがよい」と現状を肯定する力は、もとに繋がることで養われていきます。日常生活の中で自分が変われば、相手や状況も変わると意識して、朗らかに実践し続けることが肝要です。その日常の練磨こそ、常に人生を楽しむ道筋となるのです。置かれた状況を明るく前向きに生きたいものです。